



10月号

ひだまり

今月のエッセー

秋の月を見て



先月の二十七日は中秋の名月、それから、二十八日はスーパームーンが見れる日でした。皆さんはその両日の月をご覧になったでしょうか？

中秋の名月は元々、旧暦の八月十五日でした。それは、秋が七月〜九月であり、その丁度真ん中の日が「中秋」八月十五日だからです。しかし、現在ではその決め方が異なります。秋分の日以前の一番近い新月の日を一日目として、十五日目を中秋とすると決められているのです。

その一方で、スーパームーンは月が地球に最も近づいたときに、満月もしくはは新月の形になった月の姿をいいます。

編集後記



盛夏に茂った木の葉は落ち始め、先月まで手近に置いてあったエアコンのスイッチも今では役目を終え、すっかり壁に馴染んでしまいました。賑やかだった夏の喪失感に、安定を失った心が何となく揺らいでいるような気がしています。

しかし、それ故に秋は魅力的なのでしょう。読書、スポーツ…、別段、他の季節でも楽しめそうな気もしますが、そういった心の揺れが、それまでと違った気持ちを私たちに起こし、新しい一歩を促すのかもしれない。

暑から寒へ。この変化と揺らぎに乗じて、私は今年も美味しく秋を味わっていきたいと思います。◆田代浩潤

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

仏教のこぼれ 「塵も積もれば山となる」



「塵という目に見えない程の小さなホコリも積もり積もれば山のように大きくなる」。または、「小さな行いをこつこつと積み重ねていくことによって、大きな結果を得られる」。おおよそ、このような意味で記憶している方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

現在では、良い意味で用いられることがあります。実は元々仏教の言葉で、「人間の塵（＝煩惱）が積もる」という悪い意味で用いられていました。

この言葉は、『大智度論』というお経の中にある、次のような一節から

きています。

「譬えば、微塵を積みて山と成せば、移動を得べきことかたきがごとし」

（例えば、細かな塵が集積して山のようになれば、もはや動かすことが出来ないようなものである）

これは、人間の根本的な三つの煩惱である貪（むさぼり）・瞋（怒り）・痴（迷い）は日々少しずつ積み重なっていき、その人を墮落させてしまうことを表しています。

だからこそ、仏教では教えの実践によって、善い心を育むことを説いているのです。

◆田中仁秀

九月二十七日、師匠が住職を務める千葉県のお寺でお通夜があり、私は初めて勤めて参りました。その日が中秋の名月の日だとは知らず、お通夜が始まる直前に師匠が、

「今日は中秋の名月だな」

と言っているのを聞いて知りました。ふ

と夜空を見上げると、まん丸と輝く綺麗な月が私の目に飛び込んできたのです。

私は、

「今日の月はとても綺麗ですね！」

と師匠に思わず言いました。感動が言葉となって表れたのです。

その時の光景は、月と澄んだ空気と虫の鳴き声とがうまい具合に調和していて秋の風情をととても強く感じさせるものでした。

私は普段から夜空を見上げ、月を見ることがあります。その日のように「綺麗だな」と思いながら見ていません。しかし、中秋の名月にしても、スーパームーンにしても普段見ている月と同じ月なのです。変わったのはきっと、それを見る私の心だったのでしょう。

◆國生徹雄

法のお話



三年度
竹村信彦
たけむらしんげん

『念ずる』

「念ずれば、花開く」
皆さんは、この言葉をご存知でしょうか？一見すると「ただ念じれば、夢がかなう」という、とても楽観的な言葉のように感じてしまいます。

これは、熊本県出身の仏教詩人である、坂村真民さかむらしんげんという方の詩の一節に出てくる言葉です。

念ずれば
花ひらく
苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった

そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

坂村真民さんのお母さんは、女手一つで五人の子ども達を育てたそうです。この言葉は、そんなお母さんにとって、自分を奮起させてくれる言葉だったのでしよう。

だからこそ、ただ念じていけば、じつとお願いをしていけば夢がかなうという、安易な気持ちから出た言葉ではないはず。

そこには、何事も一生懸命に願ひ、取り組み、自ずから道は拓けるという強い意志が込められているのです。

仏教では、「念」という言葉に「今その瞬間」という意味が含まれています。「念ずる」とは、ただ願うだけでなく、「今その瞬間、やるべきことに一心に取り組み続けていく」という実践の意味も表れているのです。

私たちが生きているこの世界は、何でも自分の思い通りになるわけではありません

せん。むしろ、思い通りにならないことの方が多いでしょう。

オリンピックに出場した選手全員が金メダルを取れるわけではありませんし、誰もがノーベル賞を取れるわけでもありません。どんなに、毎日毎日繰り返し練習したとしても、必ず結果が表れるわけではないのです。

しかし、だからと言ってその行いは無駄になるのかというと、そうではありません。たとえ結果として表れなくても、その実践を通してはじめて、私たちの心は成長するものなのです。

身体が食べ物の栄養によって成長するように、私たちの心もまた、一心に取り組んだ時間の積み重ねによって優しさや思いやりを身につけていくのです。

「念ずれば、花開く」
いつも途中で投げやりになってしまいがちな私。そんな時は、この言葉を励みに、今やるべきことに一心に向き合ってから、心を開いていきたいと思えます。皆さんも、無駄に感じってしまうような些細な事であっても、祈るように一心に取り組んでみればいかがでしょうか？

私のたからもの

『たからもの核心』



何か「たからもの」はないだろうかと考えを巡らせますが、なかなか思い当たりません。そもそも「たからもの」とは？ たからものとそうでないものの違いとは？

私は自分の物を大切にしたい質で、人にはなるべく物を貸したくない程です。結果、物もちは悪くないと自負しています。そして長く使っている物に愛着を抱きます。そんな私ですが、皮肉にも、「その物が人との係わりの交差点たり得たか否か」ということが「たからもの」とそうでないものを分けるのではないかと思うに至りました。

自分で買ったものを大切に、それに愛着を持ったとしても、それだけでは自己完結した思いに留まりがちです。しかし、それに他という存在に係わり、その物に「曰く」が付くことになり。言わば思い出がくつ付いて来るのです。

「自分の物は大事にして傷付けたくない」、しかしその思いとは裏腹に、傷付くことは同時に、その物が「たからもの」になる可能性もある気がするので。

◆田代浩潤
たしろこうじゅん



ひだまり書房



『一〇三歳になってわかったこと』

著 篠田桃紅

美術家である筆者が、一〇三歳になっていると感じた事柄が体験談として書かれており、特に、生き死に関わる死生観を中心として話が構成されています。

本を読み進めると、そこには悲観的なことなど書かれておらず、生きることの楽しさが示されています。その一方で、この命が様々な人や物によって生かされているという、意外と私達が気づいていない事柄にも目が向けられています。そして時折、昔の書物や自分の経験則を交えながら、人生を楽しむコツが書かれています。

日々変化を続ける世の中において、私達は悲観的になるのではなく、前向きに生きる楽しさを感じないといけない様に思えます。生き方はそれぞれありますが、きっとその手本となる一冊です。

◆伊藤正法
いとうしょうほう